

# 音楽によるアウトリーチ活動

インターアクティブ・パフォーマンス  
(体験型芸術教育) による取り組み

平成23年度活動報告書

リトルクラシック in Kawasaki

## 目次

はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 3
平成23年度活動概要一覧表	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 7
活動概略・要旨	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 8
活動実践内容		
1. 木管楽器の音楽に親しもう	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 13
2. 弦楽器の音楽に親しもう	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 20
3. 金管楽器の音楽に親しもう	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 26
4. 参加型オペラ	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 31
5. 幼児向けプロムラム	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 36
小学校の先生の感想	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 39
子ども達からの感想・質問	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 42
おわりに	・・・・・・・・・・・・・・・・	pg. 54

## はじめに

### アウトリーチの意義

昨今アウトリーチという言葉は、社会にだいぶ浸透してきたように感じる。音楽におけるアウトリーチは、一般的には音楽に触れる機会が少ない人々が集まる公共の場へ、音楽家の方が出向いて、プロの生演奏を身近で聴いてもらう活動である。音楽の力を充分発揮できるように、技術の高い演奏であると共に、心や感覚に訴えかける力を持つ演奏を提供することを目標としている。

我が国においては、10年程前から、また欧米では20年程前より、音楽の分野においても、研究成果を広く社会に還元するアウトリーチが重視されている。公共ホールやオーケストラ、NPO、音楽大学や芸術系の学部や学科を持つ教育機関等でも、アウトリーチ活動の取り組みを広げつつある。

同時に、アウトリーチは地域社会に貢献し活性化するという意味もある。身近な地域空間において、地域（共通）の仲間と一緒に芸術を体験することによって 文化的素養を育む機会を提供する。現代社会は、人とのつながりの希薄さがよく問われるが、音楽は元来、集団で獲物を捕まえるときの伝達手段であったり、祭祀やダンス・儀式といった共同体維持のために行なわれて来たものである。そう考えると、芸術活動は本来地域に根差したもので、人と人をつなぐコミュニケーションの手段であり、コミュニティづくりにも役立つものだと言えるであろう。

アウトリーチ活動を通して、音楽と共に生きることを地域に広めることは、社会全体の生活の質の向上にもつながる可能性がある。東日本大震災後、科学の発達と経済成長と共に築き上げた物質的豊かさが、簡単に失われることを目の当たりにした私たちにとって、音楽を含めた芸術は生きる力や向上心に触れ、生きる証になったり、人間としての根源的な価値観形成を可能にするものだと考えている。

### 現状を踏まえた問題提起

自分の経験談となるが、以前開催したピアノのリサイタルで50分に及ぶバッハの傑作であるゴールドベルグ変奏曲を演奏した際、聴きに来てくださった一般のお客様が、演奏を好意的に受け取ってくださったものの、一方で、曲が長かったとのご意見をいただいたことがあった。演奏家側が芸術的な価値が高いものと信じて提供するものと、聴衆側が聴きたいと考えているものとのギャップを感じ、残念と感じた一例である。

逆に、受益者側である小学校側の要望として、子どもための小品だと思っている「エリーゼのために」を演奏して欲しいと言われてたり、映画音楽「となりのトトロ」が授業で取り上げられていたことに、アウトリーチを始めた駆け出しの頃、困惑したことを思い出す。

クラシック音楽は難しいとか敷居が高いと思われがちだが、受け手側の求めているものと、送り手側の意識のずれを理解し、現状を踏まえた上で、聴衆と音楽家が持続的にアートの普及活動に参画していくことが重要だと考える。そして、送り手と受け手が、共同で芸術の社会的価値を作り出すには、どうしたらよいかという部分に焦点を当て、質の高い芸術をより身近なものと感じることのできるような演奏会やアウトリーチをいかに継続してつukっていかけるかを、現状の大きな課題としている。

## アウトリーチの課題

演奏家においてコンサートを開くこと自体は、演奏の準備を整える以外は、さほど難しいことではない。音楽マネジメントを通すか否かを選択し、ホールを借りる等の段取りを既成のシステムに則って行なえば、予算の問題さえクリアすれば、マニュアルに沿うように演奏会を開催することができる。しかし単発的なコンサートを開くことや、自身の演奏を披露することが、音楽活動の目的の全てではない。

一方、従来の芸術的価値を重んじ、今までのようなスタイルの演奏会をコンサートホールで行うことのみを評価する音楽家側からは、アウトリーチに対して否定的な見方が存在することも事実である。演奏家側のこうした考え方には、現状のアウトリーチの抱える問題が背景にあると考えられる。アウトリーチは本来、音楽家が日々築き上げている芸術的価値の高いものを、享受者に提供するものである。しかし、我が国ではアウトリーチの概念自体は普及したものの、活動自体はまだ発展途上の段階であり、以下の4つの課題が存在すると考えられる。

- 1) 表面的で芸術本来の意義まで到達しないエンターテイメント的なプログラムが多いこと。
- 2) 音楽家が伝えたい音楽のコアの部分を伝達するにあたって、慣習に捕われないう多様な手法を駆使したプログラムがまだ少ないこと。
- 3) 享受者との双方向的コミュニケーションが不十分であること。
- 4) 単発的で継続性に欠ける活動が多く、長期間におけるプログラムの発展的展開が難しいこと。

最後の4)については日本において、レジデンシー活動(「アーティストによる正式なコンサート以外のあらゆる活動」)を指す。レジデンシーとはコミュニ

ティーとパートナーを組んだり、関係をつくるという概念を含むもの。)を担う組織が未だに存在せず、プログラムの開発自体が発展途上にあるためだと考えられる。

## 活動の経緯

受け手と送り手の溝を埋め、音楽芸術の社会におけるポジションを見直すときに、一人の音楽家に何ができるだろうかという思いから、私は2004年に「リトルクラシック in Kawasaki」を発足させた。元を辿れば、アメリカの大学に在学していた頃に、アウトリーチ活動斡旋の先駆けともいえる大学のキャリアサービスセンターが、学生に演奏の場を提供する事業を行っており、老人施設、歴史的公共スペース、図書館といったあらゆるセッティングの中で、演奏をする経験を多く積むことができたことに起因する。たまたまその場に居合わせた生身の人間を相手に演奏して、感じ取ったことが今の自分の価値形成に大きく影響しているのかもしれない。

同時に、従来のコンサートホールで行う演奏会の数も重ね、チケットを求めて聴きに來てくださるお客様を増やす難しさも経験した。せっかくコンサートを企画しても、聴衆がなかなか会場に足を運んでくれないという現状には、積極的に対応していかなければならないと思っている。何故かというと、聴衆を開拓することは音楽家の大切な仕事の一つだと考えるからである。

また、音楽大学で教える立場となって、卒業した後も音楽を志していく学生が、社会とどのように関わっていけるかを考えると、「音楽の専門知識・技術」を高めるだけでなく、同時に「社会から求められている能力・キャリア教育」を実施し、これらの両軸を動かしていく必要性を切に感じる。私たち音楽家は、音楽を総合的に捉える力を養い、人と関わり合う伝達能力と、臨機応変に色々な状況に併せられる企画能力を身につけていくことが求められていると感じる。併せて、音楽以外の他分野と連携していく能力を開発することによって、社会に開かれた音楽活動を推進する力を高めていけると思う。

## まとめ：ティーチングアーティストとして

アメリカでは10年程前から、こうした芸術の技術面に偏重せずに、芸術的な教育を施す方法を積極的に取り入れている。そして、このような職能を持つアーティストを、「ティーチングアーティスト」と呼んで、その役割を明確に位置づけている。前述の「アウトリーチの課題」で挙げた課題の多くは、ティーチングアーティストの職能をより高めていくことによって、克服していくことが可能と考えられる。

音楽は宝の山であり、全身で聴かないと奥深いものがつかめない。この音楽の奥深さを「専門知識・技術」を用いて、紐解く作業こそが「社会から求められている能力・キャリア教育」であると同時に、音楽家の重要な社会的職能であると考えます。私自身も、送り手と受け手双方にとって、メリットがある関係を成立させ、双方にとって発展可能な環境を構築していくことを、ティーチングアーティストの新たな役割と位置づけ、これまでアウトリーチ活動を続けてきた。

今年度は、川崎市内の小学校7校を対象として、総数25回の体験型音楽教育プログラムを、共演者であるティーチングアーティストの方々と共に、送り届けることができた。「リトルクラシック in Kawasaki」の発足から8年を経て、地理的に縦に長く多種多様な地域からなる川崎市において、7区（川崎区、幸区、中原区、高津区、宮前区、多摩区、麻生区）すべての小学校にアウトリーチを実施することができた。

本報告書は、大事に種をまくような気持ちで、育成してきたこの一年間の活動内容の全貌を記録し報告することを目的として、作成されたものである。

## 平成23年度活動実績一覧 (2011.3.1-2012.3.1)

実施日	学校名・場所	対象学年	プログラム題名
2011.3.1	川崎市立古市場小学校 体育館（幸区）	全校児童	オペラ「ヘンゼルとグレーテル」鑑賞授業
2011.3.22	川崎市立土淵保育園 （多摩区）	年長、年中	「音楽で遊ぼう会」
2011.9.21, 11.7,12.5	川崎市立橘小学校 （高津区）	5、6年生	ミニオペラ「コジ・ファン・トゥッテ」鑑賞会
2011.9.26, 10.24	川崎市立高津小学校 音楽室（高津区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011.9.28, 10.5	川崎市立宮前平小学校 音楽室（宮前区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011.10.3, 11.16	川崎市立東生田小学校 音楽室（多摩区）	3、4年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2011.10.1 7,10.31	川崎市立京町小学校 音楽室（川崎区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011.10.1 9,10.26	川崎市立上丸子小学校 音楽室（中原区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011.11.1, 12.19	川崎市立上丸子小学校 音楽室（中原区）	5年生	「弦楽器の音楽に親しもう」
2011.11.1 4,11.21	川崎市立京町小学校 音楽室（川崎区）	5年生	「弦楽器の音楽に親しもう」
2011.12.7	川崎市立京町小学校 音楽室（川崎区）	3年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2012.1.25, 2.3	川崎市立高津小学校 音楽室（高津区）	5年生	参加型オペラ教室「魔笛」
2011.2.6	川崎市立上丸子小学校 音楽室（中原区）	3年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2012.2.23, 2.24,2.27	川崎市立古市場小学校 体育館（幸区）	全校児童	事前ワークショップと参加型ミニオペラ「魔笛」公演

## 平成23年度活動概略・要旨

### 活動の概略

年度の始めに小学校からの依頼を受け、授業実施の時期を設定する。実施日の数ヶ月前頃から、小学校の音楽専科の教員とメール・ファックスや電話での話し合いを重ね、小学校側の希望を聞く。なるべく授業やカリキュラム内容と関連付け、連携しながらつくりあげていくように心がける。同時に、音楽家の力が充分発揮できるような曲目やプログラムを構築する。授業の主旨形成ができた後は、多くの場合、小学校の先生は演奏者側に曲目や授業の流れ等を任せてくれる。

大まかな授業内容と形態がわかるので、以下に上丸子小学校からの講師依頼書を記しておく。

#### 1) 授業のねらい

- ・プロの木管楽器の生演奏を通して、楽器のしくみを理解したり音色を味わったりする。

- ・木管楽器とピアノのアンサンブルを聴いたり、合同演奏をしたりして音楽を楽しむ。

#### 2) 日時

一回目 平成23年10月19日(木) 3校時 10時45分～11時30分

二回目 平成23年10月26日(木) 3校時 10時45分～11時30分

#### 3) 学習内容

オーボエやファゴットの楽器のしくみ・音色を理解した上で、木管楽器とピアノのアンサンブルを聴く。また、子どもたちの既習曲曲「オーラリー」をリコーダーで演奏したり、プロの演奏家と合同演奏したりする。

4) 場所 川崎市立上丸子小学校 音楽室

5) 対象学年 4年 4クラス (112名)

### 授業形式

アウトリーチを始めた最初の頃は、一回ずつの単発的な出前演奏会を行っていたが、数年前からは、2回ずつの連続した授業として実施している。この





## 体験型・参加型授業とは？

現場の小学校の先生は、なるべく多くの子どもたちに、実際の体験を通じた学びを提供することを重視する。知識の詰め込みではなく、子どもたちが、自らの体験を通して、感じ取ったり、思案することを触発する教育は、音楽以外の分野でも、尊重されている。教育する(educate)の語源は、「引き出す」ことであって、知識や情報を学習者に詰め込むことではない。学習者が持っている経験を用いて、そこにむすびつくような体験を重ねることによって、独自の総合的な学習を行なうことができる。そのように実体験に基づいた多角的な理解力を養ったり、課題解決能力を養ったり、新しいことを発案する創作能力を培うことは、長期的な教育目標である。

音楽芸術の教育においても、音楽家が聴衆と双方向的に関わり合い（インターアクト）、影響し合いながら、文化的素養を高めていくことに、焦点をあてるプログラムが考えられる。このような体験型のコンサートのことを「インターアクティブ・パフォーマンス (interactive performance)」と呼んでいる。演奏者が聴衆の音楽的な感性に働きかけ、聴く側の想像力、思考力、聴く力を引き出していく手法を交えたパフォーマンスのことを指す。その手法には決まった方法があるのではなく、夫々の演奏者の技量が問われる部分である。音楽家が音楽を掘り下げていく中で、適切な方法を考案していかねばならない。

非専門家に自分の専門の魅力を説明することが、アウトリーチの定義であるからには、まず専門家側が、自身の長い間に身に付いた先入観を取り除き、自分が始めて楽器に触れたときや、始めて音楽で感動したときの体験を振り返ることも必要かと思う。

インターアクティブ・パフォーマンスを実施する際の、ポイントを3つ挙げておく。これは、ティーチングアーティストであり、米国ジュリアード音楽院で教鞭をとっているワレス氏の著書 (Wallace, David. *Reaching Out A Musician's Guide to Interactive Performance*, New York: McGraw-Hill, 2008) から引用した。

- ・ 聴く人に音楽に入り込みやすくする入り口をつくる。
- ・ 情報提供のみ留まらず、音楽の表面的な部分（外側から）ではなく、音楽の持つ力を内側から引き出せるようにする。
- ・ 情報の前に実体験できるような、音楽への取っ掛かりを探る。

実際には、演奏する曲の何がすごいのか、聴いている人にどんなことを感じ取ってもらいたいのか、面白いことはどんなことか、曲に関連するお話や歴史的に興味深いエピソードがあるか等を考えることになる。そのために、資料収集をしたり授業で使う備品をつくったりして、送り手に伝えやすくするためのあらゆる手段が考えられる。

実際現場でどのようなインターアクティブ・パフォーマンスを実施したかについての具体的な例として、今年度の活動にみられる各種の取組みを、以下に報告する。

## 「木管楽器の音楽に親しもう」

### 一回目の授業

4年生の音楽の学習として、「地域に開かれた子どもの音楽活動推進事業」や「夢教育21推進事業」として講師依頼された。木管楽器の授業は、京町小学校、上丸子小学校、高津小学校、宮前平小学校の4校にて実施した。対象者は4年生全児童。演奏者は、バスンに小山 清氏（元日本フィルハーモニー交響楽団所属）、オーボエに萩森 幸子氏（フリー奏者）、ピアノは大類（国立音楽大学／洗足学園音楽大学講師）が担当した。

楽器紹介では、オーボエとバスンがダブルリード楽器であることを説明。子どもたちは、既に配布プリントを読んでいて、プリントを見ながら聴く生徒もいた。プラスチックのストローでも吹き口を工作すれば、リードの役目をして長ければ低い音、短ければ高い音が出せること、長さを変えなくても孔を幾つか開けて、開閉することで音階が出せること等を、実物を吹きながら説明。



### ♪ ストローを欲しがると子どもたち

オーボエとバスンの面白い演奏例として、アニメ「クレヨンしんちゃん」の音楽の一部が吹かれると、「知ってるー！」という歓声があがった。また、アニメ「魔女の宅急便」から“海に見える街”をピアノの伴奏にのってオーボエが演奏すると、これもまた子どもたちにとって、聴き覚えのある音色が出て来たので、反応が大きかった。今まで何気に聴いていたものと、目の前にある楽器むすびついた驚きの瞬間だ。



♪ 東洋のリード楽器、チャルメラを吹く

オーボエとバスンでの音域の比較をし、バスンは低い音も出せるし高い音もかなり出せ、音域が広いことを吹きながら説明。また、全く同じ高さの音でも、夫々の楽器が持つ音色（オーボエが吹くよりバスンの音は、かなり高く感じられた）が異なることを実際に聴き比べる。



♪ ダブルリード楽器のオーボエとバスン

バスンの演奏例は、ラヴィルの「ボレロ」である。子どもたちがボレロの繰り返し出てくるリズムを手拍子で叩き、バスンがテーマを吹く。バスンが奏でる「水戸黄門」のテーマ曲のリズムとも関連づける。多様な年代層の演奏者が集まるとそれだけ、音楽に幅が出来る。

授業のテーマは木管楽器であるから、本来ならばピアノは伴奏に徹すればよいのかもしれない。金管、木管、弦楽器と比べると、ピアノは常に音楽室にあり、珍しくないと思いきや、蓋を開けた状態のピアノに興味を持ち、ピアノの内部や、音の出るしくみも知りたいという要望があった。他の楽器同様、ピアノの特徴が知りたいという子どももいた。他の楽器に比べて、ピアノを習っている子どもも多く、興味があるようだったので、ピアノについても、他の楽器同様、説明をすることにした。

ピアノの紹介では、ハンマーを手に持って示す。鍵盤を押すとアクションが動き、ハンマーのフェルトが弦を叩いて鳴る仕組みや、10本の指一つ一つを鉄琴のマレットになぞらえて沢山の音を同時に出すことができることを説明。

演奏例に使ったラヴェルの「水の戯れ」は、黒板に大きな譜面を掲示し、五線紙の上を細かいの音がつくる音型が、あたかも波のうねりのように並んでいることを確認。ピアノから噴水のように流れ出る音のイメージが合っていることに子どもたちはうなずいていた。

一回目の授業の後子どもたちの、感想や質問を読むと、それぞれの楽器に興味を持ち、楽器に関する質問が多かったこと他、「どのくらい練習すれば上手になれるか」や、「音楽家になるうと思ったのはどうしてか」等、楽器を奏でる演奏者側の方にも、興味を広げていることが伺えた。（子どもたちの感想・質問全文はpg. 39 を参照。）

## 二回目の授業

二回目の授業の冒頭では、一回目の授業後に書かれた子どもたちの質問に、文章で答えきれなかったものを、演奏で実際にデモンストレーションしながら説明。授業では、主に音楽をじっくり聴くことに焦点をあてるように組み立てた。一番の聴かせどころは、プーランクのピアノトリオ。この曲は、変拍子や不協音を多く駆使し、大人にとっても、決して簡単な曲ではない。難解でつまらない曲だという印象を子どもたちに植え付けてしまったら大変なので、共演者間で一番時間をかけた曲である。

まず、第一楽章を演奏。通奏後、「どう感じたか」という質問をしたが、子どもたちからの、反応があまりない。その種の質問には、始めて聴く曲で印象があいまいなときや、曲が充分消化しきれていないときには、答えがすぐには返ってこない。答えやすい雰囲気づくりや、もっと答えやすい質問を用意しな

なければならない。演奏を始める前に、後で質問をすることを伝えておくことも必要だと思った。

続いて、第三楽章の演奏に移る。演奏の前に、曲の一部を使って、紙芝居を披露した。ジャン・ド・ブリュノフ作「ぞうのババール」の絵本を拡大コピーして紙芝居をつくり、トリオの節にお話をあてはめた。それを、ナレーションと絵と音楽を一緒にして、お話に出てくる登場人物の様々な感情の変化、場面の移り変わり、動き等を、音楽でも表現していると説明。



♪ 「ぞうのババール」の紙芝居をナレーションと絵と音楽で紹介

紹介されなかった節にも、ストーリーをつくってみるように促しつつ、トリオの3楽章を通して演奏。

授業中には、直接子どもたちの意見を聞くことができなかったが、教室に戻って書いてくれた感想文から、想像力をはたらかせ、いろいろなことを感じ取ったことが伺える。曲が難しすぎるのではというこちら側の懸念は、払拭できたような気がする。以下、一部を記載する。



♪ プーランクのピアノトリオを演奏する3人

「本をよんでいなくても何となくお話が分かってすごい。」

「少し塔の上のラプンシェルを見ているような気がした。」

「風景がよく伝わってきた。」

「1曲の中に楽しそうなところとか、静かなところとか、場面がころころと変わっていたのに、気がついた。」

「プーランクの第3楽章で、悲しいところと明るいところを分かれていっぺんに弾いていて、うきうきわくわくしました。演奏している皆さんがリズムに乗って演奏していたので、ぼくたちはすごいその音楽になりきって聴けました。」

「たくさんの音がプーランクの曲に含まれていてふしぎでした。ピアノも気持ちを考えて弾いていきたいです。」

「紙芝居が楽しかったです。」

「ぞうのババールの物語がすごくあっていて登場人物のきもちがわかりました。」

「ピアノで、本のいろいろな場面が作れるとは思わなかったのでびっくりしました。」

「お話を想像して聴くことができた。」

「ババールのお話を想像するのが面白かったです。」

授業の最後は、子どもたちによるリコーダー合奏（各学校で学習している曲、“オーラリー”や“風の置き手紙”）。演奏者からのコメントを貰った後、同じ曲を今度はオーボエ・バソン・ピアノの演奏で聴く。自分たちが演奏できる位よく知っている曲なので、演奏後の反応も大きい。その場で、感想もたくさ

ん出た。以下にその一部分を記す。子どもたちに寄り添ったプログラムづくりの重要性を改めて感じた。

「“置き手紙”を演奏してもらい、すごくなめらかできれいで優しい音だった。」

「私たちが吹いた“オーラリー”とは違い、暗い感じと少し明るい感じが入っていて、風がゆっくり滑らかに吹いていて妖精がそーっと出てきたイメージがしました。」

「ぼくたちの“オーラリー”と違って、オーボエ、バソン、ピアノで聴いたのは滑らかな感じでした。」

「皆さんの“オーラリー”を聴いて、一風変わった世界に入れました。」

一連のプログラムはここで終了するのではなく、授業後、子どもたちが再度二度目の授業の感想・質問を書く。演奏者は後日、音楽の先生からそれを受け取る。この振り返りの時間が、子どもたち・演奏者双方にとって大事だと感じる。子どもたちにとっては、受け取った体験を自分の感覚に落とししていく反芻の時間であり、演奏者にとっては、授業評価を受け取るような省察の機会となる。その一部を紹介する。子どもたちの感受性の豊かさに驚く。

「音楽を聞くときに目をつぶっていてもたら頭の中でいろいろなことが想像できました。」

「とてもきれいな音声だった。どこか、さみしさや悲しみがある音色なのに、やさしさやあまさがまざって自然に心が入っていくようだった。」

「初めバソンは暗い曲に向いていて、オーボエは明るい曲に向いているなど思っていたけれど、2回目の授業でバソンは明るい曲にも向いているし、オーボエも明るい曲にも暗い曲にも向いているんだと感じました。」

また、子どもらしい前向きな姿勢や向上心を感じるコメントもあった。

「少し難しい音楽に対しての関心が深まりました。そして、次から楽器を吹く時は、心をこめて吹こうと思いました。」

「今まではどんな音かなとか速さはどんなかなという考え方で聴いていたけど、今日の演奏で音が会話をしているようだったので、これからはどんなことを表現しているのかイメージしながら聴きたいです。」

自ら、自分たちの聴き方を評価しているものもいた。

「一回目のときより、皆演奏の聞き方がうまくなっていました。」

子どもは、小さな哲学者ではないかと思わせる意見もあった。音楽家側は、子どもたちの測り知れない可能性に見合うものを毎回提示できるようにしないといけないと身が引き締まる。

「音楽は人の気持ちを変えることのできる大切なものだと思います。」

「わたしは皆さんが自分の楽器が大好きなんだなーと思いました。わたしはピアノを習っていて、時々わたしのピアノヘタさにいやになります。しかし、全部ひけたときのうれしさはヘタで投げ出したかったわたしを消してくれます。音楽ってそういうものなのかなと思います。」

「ぼくは、音楽は心の詩だと思います。」

## 「弦楽器の音楽に親しもう」

### 一回目の授業

5年生の音楽の学習として、「地域に開かれた子どもの音楽活動推進事業」の一貫で講師依頼された。弦楽器の授業は、京町小学校と上丸子小学校の2校にて実施。対象者は5年生全児童。演奏者は、ヴァイオリンに松田 洋子氏（元昭和音楽大学講師）、チェロに加藤 泰徳氏（フリー奏者）、ピアノは大類が担当した。

楽器紹介を始める前にまず一曲、ハイドンのピアノトリオ（ト長調）Hob.XV:25の終楽章を通奏した。この楽章はジプシー風のロンドで、軽快なリズムが特徴的。通奏後、子どもたちに何でも良いので、第一印象を聞いた。楽器のことや演奏についてコメントするのかと思いきや、「終わった後の皆さんの笑顔が印象的でした。」と演奏者の顔の表情に着眼していたことに、一同、大笑い。「演奏者も一生懸命に演奏するので、ホっとするのです。」と返す。身近で生演奏を聴くおもしろさは、こんなところにもあるのだなと子どもの視点に、おもわずほころんだ。

その後、各楽器の紹介。事前配布プリントにも書かれているように、チェロは人の身体に最も近いサイズの楽器のため、チェロから出る音は人の歌声にも近く、またとても親しみやすいと説明。「チェロの下についているエンドピンの役割は何か」や、「ヴァイオリンのように抱えて演奏できないのか」等の質問にその場で答える。「弦を押さえていて指が痛くならないか」という質問には、子どもに近づき、指の大きなたこをみせると周辺の子どもからも驚きの声があがる。演奏曲目はチェロ曲として最も有名で、教科書にも載っているサン・サーンス作曲「白鳥」。身体にも伝わる心地よい振動にうっとりとして聴き入っていた。



♪ 白鳥を演奏するチェロの加藤氏

ヴァイオリンの楽器紹介では、まずチェロと大きさや音域の比較をし、いろいろな奏法を夫々の楽器で弾いてデモンストレーションした。弦をはじいたり、ミュートをつけたり、弓でこすって音を出したり、ヴィブラートをかけたり、表情によって、弾き分けられることを説明。弦の繊細なニュアンスの変化に聴き入る。

止めねじを緩めて弓に張ってある馬のしっぽの毛を、風に揺れる本物のしっぽのような状態すると、子どもたちは納得。

ヴァイオリンの演奏曲目は、クライスラー作曲「中国の太鼓」“*Tambourin Chinois*” Op.3をピアノ伴奏付きで演奏する。「バイオリンの先生が首を振っていて、すごい表現力だった。」や「先生は音楽の強弱を体で表現していました。」と、松田先生の演奏中の動きに注目する子どもたちが多かったようだ。

その後、チェロとヴァイオリンのデュオで、日本歌曲のメドレーを演奏して、弦だけの音色を聴く。

ピアノの紹介は「木管楽器の音楽に親しもう」(pg. 14)で記しているので、ここでは割愛する。

授業の終わりに、クライスラー作曲「愛の喜び」を3人で演奏して締めくくる。



♪ 段差がある教室では、3人がアイコンタクトがとれ、音の響きよい配置を工夫

## 二回目の授業

二回目の授業は、チェロの加藤氏の作曲した作品を演奏。音楽をつくる作曲家の気持ちや、曲にこめる想いを作曲家本人が語る。曲のタイトルは、“lolosoju”。元々大阪コレクション（ファッションショー）に出展したデザイナーの造語とのこと。服のデザインのテーマが女性の力強さだということで、「花がゆっくりと時間をかけて開いていく時の一連の大きな力の存在を、音楽に繋げて作曲した。」と、曲づくりの動機を説明。

作曲家本人による演奏を聴きながら、子どもたちが心の目でみたことは、以下の通り。

「本当に少しずつ花が開いていくように思えました。」

「花がゆっくりゆっくり開いていくように表現されていると思いました。」

「小さい音から大きい音へ変化しているところが、花ががんばって咲こうしているイメージがあるなと思いました。」

「花がゆらゆらゆれている感じがしました。」

この体験を踏まえ、次は現存しない作曲家だが、きっと加藤氏と共通する想いを持って、作品に取り組んだであろうラヴェルの紹介に移った。黒板に印象派の画家クロード・モネの「睡蓮、水の習作：朝」や「ヴェトゥーユ」の複写

を掲示し、絵画で表現される水と光による色の模様と、音楽で表現される音の粒や線の流れるような動きを関連づけた。



♪ モネの画の複写と、ラヴェルの曲の聴き所のポイント等の掲示

演奏曲目はラヴェルのピアノトリオのフィナーレ。演奏前に聴いてもらいたい2つのポイントを挙げた。まず一点目は同じメロディーが何回も曲の中に出てきて、その度に音色がかわっていること。実際にその場所を演奏してどの楽器が主旋律を担当しているか、他の楽器はどのような材料を使って雰囲気を高めているかを、問いかけた。伴奏を担当しているとき、弦が長いトレモロやトリル、ハーモニクス、ピッチカートのような特殊な奏法を使っていることを弾きながら説明。

この曲はフィナーレの特質もあり、高揚感が強く、華やかな雰囲気がある。もう一つのポイントは、作曲家がどのようにこうした感情の高ぶりを表現しているかを聴くこと。曲のクライマックスでは、音型の上降・下降する向きがどうなっているか、リズムの速さ・音量・音の厚みがどのように変化しているか等についての意見を出してもらった。意見に詰まる場面もあったが、小学校の先生が子どもの名前を呼んで、問答に加わってくださったおかげで、ポツポツと意見が出た。

ラヴェル自身が言っているように、「芸術の材料とは、感動と感受する力である。」としたら、こうしたことに子どもたちが気づくことによって、作曲者が一つ一つの音に込めた音楽によるメッセージが伝わるのだろうと思う。

その後、フィナーレを通して演奏。以下、その曲に関する子どもたちの感想を記載する。

「同じ音楽が何回もくり返されていて、きれいではなやかで聴いていて楽しくなりました。情景が浮かんでくるようで楽しくなりました。」

「作曲家達は、何かのイメージを浮かべながら作っているんだなと思いました。」

「作曲する気持ちが少し分かることができ良かったです。」

「僕は、作曲家の人がいろいろのことを考えているんだと思い、今度からはその気持ちが知りたいです。」

「音楽の雰囲気想像して聴くと、とっても音楽が楽しくなること発見しました。技がたくさんあって驚きました。」

「音楽を作った人の気持ちを考えると、音楽が楽しくなるなと思いました。」



♪ ピアノトリオを演奏する3人、目前で鑑賞する子どもたち

ラヴェルの後は、子どもたちがよく知っているジブリの曲を、演奏。馴染みのある曲を聴き、思わず声のでてしまう。プログラム演奏曲中で、一番子どもたちがにぎやかになる。

「“ハウルの動く城”で、あそこまでバイオリン、チェロの音の強弱ができるのは、とてもすごいと思いました。」

「“ハウルの動く城”では、僕は感動して鳥肌が立ちました。」

授業の最後は、子どもたちの合奏（各学校で学習している曲、“キリマンジャロ”や“生命の息吹”）。演奏者からアドバイスをもらった後、同じ曲をヴァイオリン・チェロ・ピアノで聴く。子どもたちの感想には次のような意見があった。

「私たちのキリマンジャロをもっと強弱をつけたいと思います。」

「3人の先生のキリマンジャロを聴いて、力強さに感動しました。」

## 「金管楽器の音楽に親しもう」

### 一回目の授業

3年生の音楽の学習として、東生田小学校、京町小学校、上丸子小学校の3校にて実施した。対象者は3年生全児童。演奏者はトランペットの曾我部清典氏（洗足学園講師）ピアノに大類、賛助出演したのは洗足学園音楽大学の学部生による金管五重奏のグループ5名。

楽器紹介では、トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバ夫々の楽器の長さと同様に相当する園芸用ホースを、夫々の楽器のマウスピースに装着し、その状態でヘンデル作曲「水上の音楽」を演奏した。演奏中にホースに軽く触れることを許されると、ほとんどの子どもたちが集まり、奏者が吹く度に感じられる振動や音の出方を実感していた。



♪ホースに触って音の出るしくみを体験

その後、マウスピースを楽器本体につけ直し、同じ曲を演奏し、その前の状態との比較をしてもらった。ホースの太さで音の高低が異なること、それに応じて、マウスピースの大きさが違うこと、楽器によってホースの長さが違うこと、ホルンは音の高さの割にはホースが長かったこと、唇の動きだけでもかなり音の高低をつけられること等の発見を、言葉だけの説明よりも、よくわかる実演だったと思う。この体験をした子どもたちの感想・質問は以下の通り。

「ホースで吹いてくれた時に、持っていた手が振動したので、びっくりしました。」

「チューバのホースは、すごく太いけど、トランペットやホルンはすごく細いホースでした。」

「チューバの長さが、あんなに長いとは知りませんでした。」

「トランペットは、ホース1本でも出来るのに、何故押すところが3個あるんですか。」

楽器紹介に用いた他の演目は、サン・サーンス作曲「動物の謝肉祭“ (*Le Carnaval des Animaux*)」 。曾我部氏によってピアノと金管楽器のために編曲されたものを使用。小さな音楽劇風にし、音楽に登場する様々な動物たち（ライオン、象、亀、雄鶏雌鳥、カンガルー、ろば、白鳥）のセリフを織り交ぜながら、楽しいお話を音楽で展開していった。楽器の音色と音楽から、ストーリーを想像しながら、聴いてもらった。以下、子どもたちの感想を記載する。

「演奏が楽しくて劇も楽しかったです。」

「カメの遅い行動がよかったです。」

「動物と楽器の音が合っていたからおもしろかったし、きれいでした。」

「本物の動物のようでした。」

「お面をかぶった先生たちが出てくるので、とてもおもしろかったです。演奏も聴けて劇も見られておもしろかったです。」

「口バの？マークのクイズがおもしろかったです。ゾウ役の本田さん（チューバ専攻の学生）の声や音がおもしろかったです。カッコウの音もおもしろかったです。」



♪ 白鳥のお面をつけて「動物の謝肉祭」を演奏する曾我部氏

金管楽器のみのアンサンブルは、マルコム・アーノルド作曲の金管五重奏曲やエリック・エヴァイゼン作曲のフロストファイヤーを演奏した。



♪ 金管五重奏を演奏する大学生

## 二回目の授業

一回目の授業で楽器紹介を一通り終えた後、2回目の授業を行なった小学校では、トランペットとピアノのデュオ演奏会を行なった。一つの大きなテーマ「地球」を設定し、そこから太陽、光、空気、水、雨等、関連のある事象を子どもたちに挙げてもらった。それらを、音楽と結びつけ、夫々のテーマを作曲家がどのようなメッセージとして音楽にこめたかを聴いてもらった。

♪ 板書した「地球」から波及した事象関連図



演奏曲目	
ベートーヴェン	交響曲第6番「田園」より4楽章「嵐」 リスト編曲
佐藤聡明	「光」
ラヴェル	「水の戯れ」
田中カレン	<i>Silent Ocean</i> より "love song"
田中カレン	こどものためのピアノ曲集「地球」より 15番「地球」
久石譲	「海のみえる街」、「崖の上のニヨ」

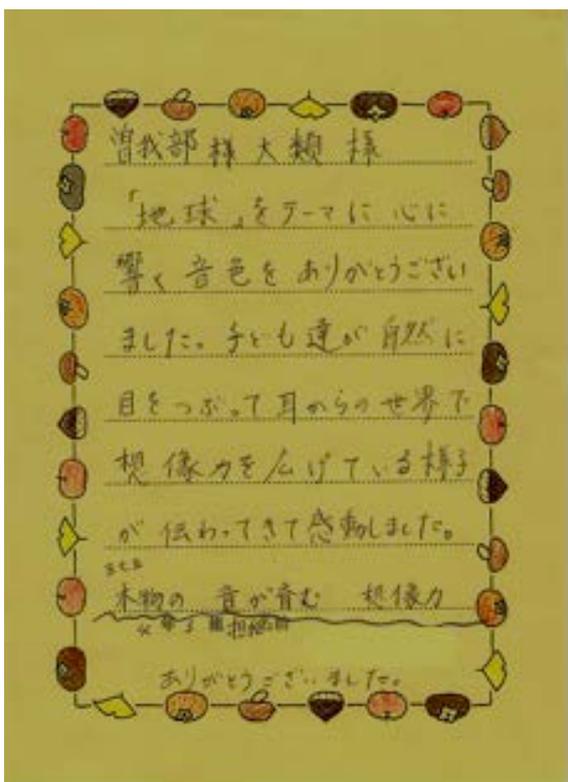
授業後教室へ戻って、演奏を振り返りながら、子どもたちが書いてくれた感想文を読んで、子どもたちの心に、偽りは決して通らないこと、そして子どもだからといって、演奏を加減してはいけないことをあらためて思い知った。子どもたちの創造性の豊かさに演奏者側の方が心揺さぶられた。以下に子どもたちの声の一部を記す。

「目をつぶって聴いていたら、いろいろなことが浮かんできました。嵐や光や水が浮かんできました。音の大きさがかわったりしていろいろな場面が浮かんできました。私もピアノでいろいろなことを表現したいです。」

「わたしは最初は光や水が音楽に関係ないと思いました。だけど、曾我部先生と大類先生の曲を聴いて、光と水は関係があるのだと思いました。」

「私はピアノはいろいろなことを表現できることを知りませんでした。雨や風の音楽はすごかったです。」

「ピアノの演奏（嵐）を聴いて、神様が街を暴風でこわしているイメージでした。町をこわしているのが、神様の悪いところ。でも、神様から地球人への試練かもしれない。」



♪ 授業を子どもたちと一緒に熱心に聴いてくださった担任の先生からのメッセージ

## 「参加型オペラ」

5年生の音楽の学習として高津小学校と、全校児童の鑑賞授業として古市場小学校の2校にて実施した。出演者は声楽の須永 尚子氏（洗足学園教授）、境 信博氏（洗足学園講師）、ピアノの大類、洗足学園音楽大学の声楽専攻の卒業生・大学院生・大学生7名とフルート専攻の大学生1名である。平成22年度にも両校にて、「ヘンゼルとグレーテル」のミニオペラ公演を実施しており、今回の体験型オペラの授業は2回目の試みとなる。今年度の演目はモーツァルト作曲「魔笛」。

高津小学校では、5年生5クラスを対象とした2回の連続授業。昨年度の経験から、今年度はより多くの子どもたちにオペラに関わらせて欲しいという小学校側の要望があった。多くの子どもたちが、どのようなかたちでオペラに関わることができるか、短時間で習得できる踊りや合唱・合奏をオペラのどの場面に創出するか、限られた時間内で仕上げ、出演者と共に完成したものとして披露できるかという、様々な課題を抱えたプロジェクトであった。

古市場小学校では、全校児童対象で1時間半程度の一回の鑑賞授業。こちらの小学校では、5、6年生の有志30名程度を募集し、事前に2回のワークショップを実施し（公演日前の2日間の6校時目）、高津小学校同様、子どもたちにもオペラ体験ができるように企画した。

### 一回目の授業／ワークショップ

まず、オペラのあらすじの説明をすると共に、子どもたちの配役を決めた。最初は人気が集まる役があったりして、人数にばらつきがあったが、だいたい希望通りの配役に収まった。オペラの中で、子どもたちが関わる場面や配役は次の通り。

- ・ 3人の童子を合唱をするグループ
- ・ フィナーレで出演者と一緒に合唱するグループ
- ・ 銀の鈴の音を担当する鉄琴合奏をするグループ
- ・ 踊りのグループ（鈴の踊り、お化けの踊り、鳥の踊り、大蛇の踊り）
- ・ パパゲーノの首つりの場面の助っ人として、悪魔の手下を演じる役
- ・ 舞台の備品を創作するグループとして「水と火の試練」のシーンを彩る赤と青のポンポンを鈴蘭テープで作る係
- ・ パパゲーノが捕まえる鳥を、割り箸や画用紙で作る係

早速、夫々のグループに分かれて、夫々の場面毎に練習や創作に取りかかった。各グループに出演者からの担当を一人ずつ付け、指導を行なった。小学校の音楽の先生にも指導や創作に加わって頂いた。

役になりきって、振り付けやダンスをするグループ、はじめのうちは、躊躇してなかなか声を出してくれなかったが、プロの音楽家から歌の指導してもらいながら、少しずつまとまってくるグループ、「もうマレットを置いてください」と言われてもまだまだ練習を続けたい鉄琴のグループ等。45分の授業時間の制限の中、夫々が違う課題をこなすので、早く終わって時間を持て余すグループと課題が仕上がらず時間が足りないグループとが出来てしまい、一部のグループの子どもたちが騒がしくなってしまう場面もあったが、全体的には子どもたちは楽しそうに友達と一緒に、積極的に取り組んでいた。次の授業は本番だということに気づくと、子どもたちは「緊張するー。」と、公演に向けて気が引き締まる。



♪ 「大蛇の踊り」を練習する子どもたちとメゾソプラノ／指揮者の須永氏

## 二回目の授業／本番

いよいよ、本番。休み時間中に来て、練習を開始する子どもたちもいた。自分たちの手作りの備品が準備され、普段使っている椅子やホワイトボードは、ステージセッティングとなり、体育館や教室が舞台に変容。

配役と名前

タミーノ:吉田龍之介    パミーナ:木下友里  
パパゲーノ:境信博    パパゲーナ:上野忍  
モノスタートス:堀江真鯉男  
侍女1:藤沢みどり    侍女2:田村瑞季    侍女3:石川友貴  
フルート:間嶋祐未

指揮:須永尚子    ピアノ:大類朋美

子どもの役

童子、大蛇、鳥のこども、悪魔の手下、鉄琴、試練



♪ 子どもたちの演じる「大蛇」とタミーノ王子と3人の侍女。大蛇はアルミ фольと黒画用紙でできた子どもたちの手作り

♪ 「お化けの踊り」  
モノスタートスの手下とパパゲーノの仲間が出会う場面。  
子どもたちは大笑い！





♪「銀の鈴」を表現する鉄琴奏者の子どもたち、人気の役でした



♪「火と水の試練」を表現する子どもたちとタミーノ王子とパミーナ姫

♪ 「パパパの二重唱」を歌うパパゲーノとパパゲーナと鳥の子どもたち役



プロの音楽家による美しい歌声が、体育館中に響き渡る。出演者は、子どもたちのすぐそばまで近寄って歌ったり、セリフに即興でその場の雰囲気に応じて、バリエーションをつけたり、子どもたちに直接質問を投げかけたりして、常に聴衆を引きつけていた。低学年の中には声を出して、笑っている子どもたちが大勢いた。時には面白く、時には暖かい雰囲気に包まれた公演だった。出演者側に加わった子どもからは、「練習の時より、緊張したけれど、楽しかった。」という意見があり、責任感を味わいつつ、その中で成し得たことの喜びを感じたようだった。

聴く側の子どもたちも、自分の仲間や同級生が、前に出て歌ったり、踊ったりしている様子を観て、音楽を自分たちのものと感じやすかったと思う。

公演後は、子どもたちが質問と感想を述べる時間があり、「楽しかった！」「来年も来てください！」という感想を笑顔で述べてくれる子どもたちがほとんどだった。



♪ 前年度の「ヘンゼルとグレーテル」公演の後、出演者に質問、「魔女はどうやって上へ登れたんですか。」

音楽の質は妥協せずに、受益者に応じた色々な場面をつくることによって、音楽への間口を増やし、子どもたちと音楽の距離を近づけると共に、芸術を通して、子どもたちの好奇心をそのまま育てていければと願う。

## 幼児向けプログラム「音楽で遊ぼう会」

年長、年中児童50名程度を対象に、川崎市土淵保育園の年長さんのお部屋にて実施。演奏は打楽器奏者の岡本ゆか氏（フリー奏者）とピアノの大類。

簡単な挨拶の後、打楽器を使ったパフォーマンスを披露。しゃがんだり立ちあがったり、子どもたちに近づいたりして、身体の動きと共にカバサやカスタネットでかっこいいリズムを刻む。

ピアノは音が発するしくみ（弦やハンマー、共鳴板）が楽器の中におさまられているため、実際に音が鳴っている様子を目の当たりにすることが難しいのに比べ、音を一つずつ叩いて出すという打楽器のプリミティブな原理は、視覚的にわかりやすく、音楽の導入として幼児に適した楽器だと感じる。

次に、子どもたちにも実際に音を出してもらおう。まずはボディーパーカッションで、簡単な3つのパターンのリズムを覚えてもらう。足をならしたり、肩や腿を叩いたり、手拍子したり。今度は、カスタネットとタンバリンと鈴で、同じリズムを叩いてみる。



♪ 鈴はこんな感じで、音をだしてみよう。

これらの楽器を始めて手にする子どももいて、大喜び。部屋中にぎやかになる。クラスをまとめるのも大変だ。どのグループが始めるか 順番を決め、一回目は中くらいの大きさ、2回目は小さく、そして最後は大盛り上がりになるように強弱をつけ、通奏してみる。演奏後に、「できた?」「どんな風に聴こえたかな?」「周りのお友達の音も聴こえた?」等の、問いかけに「できたー!」と、子どもたちは元気よく答える。



♪ 皆で一緒に始めるよ、せーの!

続いては、幼児が大好きな絵本の読み聴かせのコーナー。但し、いつもと違って、打楽器とピアノの音楽付きの紙芝居だ。「そうのババル」は、プーランク作曲、全22の小曲から構成され、ジャン・ド・ブルノフ原作の童話と音楽を融合させてメルヘン的な優しく美しい世界を創り上げている。この曲は、元々ピアノ独奏用として書かれたが、ジャン・フランセによって管弦楽用に編曲されたものもあり、今回はそれを参考にしながら、ピアノのパートに打楽器を随所に効果音として加えた。

お母さん象を狩人に鉄砲で打たれてしまう場面やいところたちが叱られる場面のドラムやウィップの音に、子どもたちはびっくりしたり、少し怖がったりし

ていた。自動車のエンジンを模倣したラチェットが面白い音をつくったり、結婚式のシーンではシンバルやスネア・ドラムが高揚感をつくる。その他にもトライアングル、ウッドブロック、カホン、マンジーラ等の音が次々と出て来て、登場人物の心情をよりわかりやすく表現した。

打楽器は数種類の楽器を一度に受け持って演奏する形態なので、楽器やマレットがかわる毎に音色がかわることが明確で、その変化は子どもたちにもわかりやすい。

保育園の先生には、紙芝居をみせる係を担当してもらい、ナレーションは演奏者が担当した。



♪ 「そうのババール」音楽付きの絵本の読み聞かせ

最後に、園児が普段歌っているお馴染みの曲「たのしいね」（寺島 尚彦作曲）をピアノと打楽器と一緒に合唱する。節と節の間には、♪♪のリズムを手拍子で叩く。

小学校入学を目前に控えた園児。これからも心の中の、音楽や色々な世界をどんどん広げて行って欲しい。

## 小学校の先生の感想

### 質問内容

- Q1. クラシック音楽のアウトリーチ（出前演奏会）をご自身の授業に取り入れようと思ったのはどうしてでしょうか？
- Q2. 子どもたちにはどのような体験、学びをしてもらいたいとお考えでしたか？
- Q3. 実際に我々のアウトリーチをお聴きになり、いかがでした？
- Q4. 先生にとって、大変だったことはどのようなことでしょうか？
- Q5. 良かったことと、逆に改善した方がよいとお感じになったことを教えてください。

### 名畑靖子先生 上丸子小学校音楽専科教諭

Q1.

川崎市教育委員会で行っている「地域に開かれた音楽活動」の予算がとれたので実施しました。

Q2.

プロの方の生の演奏をそばで聴いて、子どもたちの感性への刺激となり、これからの生活に音楽に関心をもって、いろいろな形で音楽を取り入れて潤いのある時間を過ごしてもらいたと思いました。

Q3.

こんなそばで、トークを交えながら素晴らしい演奏を聴けて、どの子も感動していました。楽器それぞれのしくみを詳しく実際に音を聴きながら説明を聞いたり、演奏を聴きながら絵を見て想像する楽しさを味わったりしていました。また、子どもたちは、楽器のことや演奏者になるまでのことについて、質問して答えていただき、音楽をより身近なものと感じたようです。

Q4.

特に大変だったことは、ありません。

Q5.

この機会で、管理職にも、アウトリーチの理解が得られたので、予算の許す限り続けて行きたいと思います。ありがとうございました。

## 長谷川 知子先生 京町小学校音楽専科教諭

Q1.

CDやDVDでは、感じ取ることのできない生の楽器の演奏を、子ども達に聴かせたかったのが一番の理由です。また、教育委員会から予算が出ると言うことも、もう一つの理由でした。

Q2.

子ども達が実際に音楽の授業の中で取り組んでいる合奏を聴いて頂いたり、そして、先生方の演奏する同じ曲を聴かせて頂くことにより、表現の違いや演奏の音の違いなどを身近に感じる事ができ、良かったです。子ども達の感想から、一番感動した様子がうかがわれました。

Q3.

素晴らしい先生方の演奏を聴かせて頂き、感動しました。音色の美しさが素晴らしかったです。クラス毎にやったりすると、もっと実際に楽器を持たせて頂いたり、体験ができたりすると、より身近に感じる事ができたかもしれません。予算のことや高価な楽器なので難しいと思いました。

Q4.

大類先生に色々ご配慮頂き、大変だったことはありませんでした。

Q5.

その都度、先生と相談しながら進められて、良かったと思います。私の方こそ初めてで、ご迷惑をたくさんおかけしたと思います。本当にありがとうございました。

## 近清 えり子先生 宮前平小学校音楽専科教諭

Q1

鑑賞の学習は、CDで聴くことが多いのですが、本物の楽器を目にしたり、音を聴いたりすることができません。また、大きなホールでの演奏会では、子どもたちが近くで楽器を見たり、触ったりする機会がありません。そのため、1年間で最低1回は、どの学年でも子どもたちの近くで演奏していただき、より身近に音楽を感じ取ってほしいと考え、授業の中に、演奏会を取り入れています。

## Q2

まずは、子どもたちに「音楽っていいな～すごいな～きれいだな～」と思ってほしいです。そして、クラシック音楽を音楽学習の1つとしてとらえるのではなく、「私も演奏してみたい。」「音楽会でもっと音楽を聴きたい」など、子どもたちの音楽への興味・関心が広がることを願っています。

音楽学習のなかでは、ねらいにそった体験や学びを第1に考えています。そのため、ただ、演奏していただくのではなく、指導者である教員がその学習のねらいをはっきりさせ、そのためにどんな演奏をしていただくのかを演奏して下さる方に伝え、子どもたちがこの時間に何を学ぶのかわかるようにするように心掛けています。

今回の授業では、木管楽器の音色、音の出し方、楽器の構造の違いなどを学習の柱とし、それぞれの楽器の違いを知ってから、これらの楽器による演奏を聴き、じっくりと音楽をあじわえるようにしました。

## Q3

上記の私が演奏会でねらっていることを、演奏者のみなさんがわかってくださり、ねらいにそった学習ができたことが、とても良かったです。

子どもたちも近くで楽器の音色を聴き、音の出し方、楽器の構造を見ることができて大変良かったです。曲目も身近な曲から、少し難しい曲まであり、「演奏会」という雰囲気もあって良かったです。

## Q4

連絡を取るのが大変でしたが、メールを使って、演奏者と教員のお互いの思いを知ることができたので、良かったです。便利な世の中になって良かったです。(笑)

## Q5

私としては大満足でした。他の演奏者だとなかなかこちらの学習のねらいを理解していただくまでいかず、単なる演奏を聴くだけの演奏会になってしまうことがありました。大類先生は、私がどのような授業をやりたくて、そのための必要な演奏者を探して下さるだけでなく、ねらいにそった演奏会を考えてくださったので、大変良かったです。演奏会が特別なものではなく、カリキュラムにそったものになっているのがよいです。

## 子どもたちから寄せられた感想と質問（演奏者の答え）

「木管楽器に親しもう」の第一回目の学習を通しての、子どもたちの感想・質問とそれに対する演奏者の回答

川崎市立上丸子小学校 名畑 靖子先生 実施日：平成23年10月19日

### 1) 最初の曲を聴いての感想

テレビで聴いたことはあるけれど、生で聴くともっといい音が聴こえた。

ピアノでしかこの曲を聴いたことがないけれど、バソン、オーボエが混じってとても愉快的な楽しい曲だと思いました。

一つの楽器で弾いているように、揃っていて心に響いた。

ピアノにバソンとオーボエが加わると素敵になった。

同じ曲でも、楽器によって雰囲気、イメージが変わる。

### 2) 全体を通しての感想

オーボエとバソンの音にピアノが加わるといい音になったので、もっともっと聴きたかった。ブーランクの作曲した曲は、悲しい曲と楽しい曲が混ざっていて分かりにくかったけれど、わくわくするような曲でした。

ブーランクさんの曲は、おだやかで水が流れているようで良かったです。

オーボエがしゃべりかけていて、バソンは「うんうん」と言っているようだった。

ストローの音がおもしろかった。

いろいろなテレビにバソン、オーボエの音が出ているのがよく分かった。（クレヨンしんちゃん、魔女の宅急便）

ボレロの日本版は、「水戸黄門」だということが分かった。

着せ替え人形は、バソンの時は黒や青、オーボエは明るい色のようなようだった。

リコーダーに何故穴が開いているのかが分かりました。

いつも聴いている時より迫力があった。

オーボエ、バソン、ピアノなどの音色が暗い音になったり、明るくなったりしていた。

楽器に興味をわいてきました。

大好きなジブリの演奏が聴けて嬉しかった。

ピアノの仕組みを初めて知った。

水の曲の楽譜が水面の様に波になっているので、面白いなあと思った。

ストローでリードを作ってみたいです。

難しい楽器を簡単そうに演奏していて、すごいなあと思いました。

### 3) 3人の先生方への質問

楽器を始めたきっかけは何ですか。

オーボエ もともと音楽に興味があったので小学校のクラブ活動で始めた。

バソン 楽器を吹いてみたかったから

ピアノ 母親の薦めです。

何歳から始めましたか。

オーボエ 10歳からクラリネットを吹いていましたがオーボエは12歳から。

バスン 18歳

ピアノ 3-4歳からです。

演奏者になろうと思ったきっかけは何ですか。

オーボエ 演奏者になりたいと特に意識していたわけではなく、私にとっては音楽が1番興味深いものだったので自然とそうになりました。

バスン バスンを面白いと思って吹いているうちにいつの間にかプロになっていた。

ピアノ わたしも演奏家になりたいというより、音楽が面白いので、それを続けていきたいと思うと、やはり演奏することが一番伝わっていると思うので演奏していますが、実は人前に出て演奏するのは緊張するのであまり好きではありません。でも、上手にできた時は嬉しいです。

挫けた時あるいは苦しかった時はありますか。

オーボエ 数え切れないほどあります。

今でも時々そうなることがあります。今回のように皆さんに演奏を聞いてもらって喜んでもらえることや感想を聞かせてもらえることが私にとっての大きな励みになります。

バスン パリ音楽院に通っている頃、毎晩絶望し、朝になると頑張るぞ！と思った

ピアノ あります！音楽を本当に止めてしまえと思うと寂しすぎて、やはり続けています。

楽器を演奏しているとき、何を思っていますか。

オーボエ 楽しい曲なら楽しい気持ちで、悲しい曲なら悲しい気持ちで。

曲に自分なりのストーリーをつけて演奏することもあります。

バスン 今日は調子良い！あっ間違えた！あーお腹すいた！3列目の子が楽しそうだ！もっと良い音出したい！」とかいろいろ・・・但しいつも集中して正確に吹けるように思っている。

ピアノ 練習しているときは、すべての音が自分が思うように聴こえているか、細部に気をつけるようにしていますが、人前で演奏しているときは、この音楽の魅力が伝わりますようにと願いつつ、音に集中しようと思っています。

演奏しているときに気をつけることは何ですか。

オーボエ どんなに難しい曲であっても音符に振り回されないように気をつけています。

いつでも自分の意志を持った音を出したいと心がけています。

バスン より正確により美しくより表情豊かに

ピアノ 上の質問と同じ回答です。

音楽のどういう処が好きですか。

オーボエ 音楽は空気や食べ物と同じで、人間にとってなくては生きられないものだと思います。

楽しい時も辛い時もいつでもそばに寄り添っていてくれて、前向きな気持ちにさせてくれるところが好きです。

バスン 音色、美しいメロディやハーモニー、面白いリズム、深く幅広い表現力など、色々ありますが、基本的に美しい音色

ピアノ 心で感じるができることです。そしてその部分を他の人達と共にわかちあえるところです。

それぞれの楽器をやると思ったきっかけは何ですか。

オーボエ 中学校で吹奏楽部に入部したのがきっかけです。

私は島根県出身なのですが、島根は吹奏楽がとても盛んな県で、私が中学生だった当時としては珍しいオーボエが置いてありました。

島根県は現在も吹奏楽でとても有名です。

バソン 音が気に入ったから

ピアノ 3歳のときに始めたので、自分の意志というより、母が薦められたからです。でも、今は何故、薦めてくれたのだろうと不思議に思う位で、きっと音楽は神様かだれかからのプレゼントだったのかもしれない。

#### 4) 大類先生への質問

ピアノをきれいに弾くコツは何ですか。

まず、音楽っていいなと感じることかな。それから、ピアノはいろんなパートを全部弾かないといけないので、それぞれが、何の楽器かなとか、人の歌声を想像したりして、たくさんある全部の音が聴こえるようにすることです。

演奏するときになんで、そんなに動くのですか。

意識して動いているのではないのですが、音は動いているものなので、それと一緒に動いている方が、指も手も動きやすくなり、音楽をつくりやすくなるためだと思います。

#### 5) 萩森先生への質問

オーボエの演奏で難しい処は何ですか。

リードがいつでも同じ状態ではないところに苦労します。

その日の気候によって変化が激しいので、いつでも対処出来るように様々なタイプのリード(例えば雨が降って湿度の高い時用や、晴れて空気が乾燥した時用、夏用と冬用でも寸法など少しずつ変えています。)

重さはどのくらいですか。

約750グラムです。

何で親指に青いクリップみたいなものを付けていたのですか。

オーボエは約750グラムと重さ的にはたいしたことありませんが、それを右手の親指一本で高く持ち上げて演奏するので親指に負担が大きくなってしまいます。

私は少しでも負担を軽くするために羊の革を親指に巻いてクッション代わりにしています。

何故リードは1秒間に440回位も振動するのですか。

私達の声を出す声帯も毎秒440回振動しています。音を出すためにはその回数だけ振動することが必要なのだと思います。

オーボエは何オクターブ出るのですか。

2オクターブ半です。実はオーケストラの中の楽器では1番音域が狭い楽器です。

オーボエの音が出るまでどの位練習したのですか。

ただ音を出すだけならそんなに難しくはないのですが、美しい音を出そうと思ったら相当難しいです。今でも自分の音色はまだまだだと思っているので、もっと練習して美しい音が出せるようになりたいと思っています。

6) 小山先生への質問

バスーンとバソンは違うのですか。

ファゴットとバスーンはドイツ式、バソンはフランス式の事。ファゴットは木が楓でバソンは紫檀。指使いも違うし音色も違う

バソンの演奏の難しいところはどこですか。

美しい音で思い通りに音をコントロールすること

バソンは大きいのに何故高い音が出せるのですか。

楽器が誕生してから500年ぐらいの間に、大勢の人が楽器に夢を託して改良の努力をしてきたから

重さはどの位ですか。

3. 6Kg

何故ひもをひっかけて演奏するのですか。

楽器が重いから

バソンは長く吹くところがいっぱいあったけれど、息が続くのは何故ですか。

皆さんは普段無意識に呼吸しているでしょう。私は深い呼吸が出来るようにいつも心がけています。健康にも大変良くお奨めです。

何オクターブ音が出るのですか。

3オクターブ半

音が出るまでどの位練習したのですか。

音は楽器を持った最初からでました。きっと皆さんも最初から鳴らせるかもしれません。大変なのはその後です。

「木管楽器に親しもう」の第二回目の学習を通しての感想

川崎市立上丸子小学校 名畑 靖子先生 実施日：平成23年10月26日

本の物語と合わせて演奏して、象の気持ちを音楽で表していました。明るい音や暗い音を使い分けていました。

音楽は人の気持ちを変えることのできる大切なものだと思います。

音楽が会話しているような演奏で、滑らかできれいでした。(面白かった)

演奏する前にどんな感じで演奏するかで、音色が違ってくることが分かりました。

ぼくは、音楽は心の詩だと思いました。

3つの楽器が、役割を分担していてすごいと思います。

バスンは低い音、オーボエは高い音、ピアノは雰囲気を表す役割なのか分かりました。

バスンとオーボエの違いは何か、もっと調べてみたくなりました。

ぼくは1回目より迫力があつたように思えました。

指さばきがすごかったです。

皆さんの「オーラリー」を聴いて、一風変わった世界に入れました。

日本でバスンのプロが、小山先生一人だと聞いてびっくりしました。

少し難しい音楽に対しての関心が深まりました。そして、次から楽器を吹く時は、心をこめて吹こうと思いました。

悲しいところがあつたり楽しいところがあつたりで、メロディがいろいろ変化しているなと思いました。

最後の「崖の上のポニョ」で、バスンの人は顔が赤くなるほど息を止めて、オーボエの人は唇を丸くするなど工夫して、ピアノの人は顔に表情が出ていて3人ともがんばっているんだなと思いました。

オーボエのリードをつけない方に何かクリームのようなものを付けていました。そして最後にオーボエを3つくらいに分けていました。

ぼくたちのオーラリーと違って、オーボエ、バスン、ピアノで聴いたのは滑らかな感じでした。

私たちが吹いたオーラリーとは違い、暗い感じと少し明るい感じが入っていて、風がゆっくり滑らかに吹いていて妖精がそーっと出てきたイメージがしました。

私もリコーダーを吹くときは、滑らかに吹きたいと思いました。

本と同じような印象でピアノが弾けていてすごいなと思いました。

3つの楽器が1つになっているなと思いました。

ピアノで、本のいろいろな場面が作れるとは思わなかったのでびっくりしました。

今まではどんな音かなとか速さはどんなかなという考え方で聴いていたけど、今日の演奏で音が会話をしているようだったので、これからはどんなことを表現しているのかイメージしながら聴きたいです。

「象のババル」の曲を聴いて、少し「とうの上のラプンシェル」を見ているような気がしました。

挫けたときはがんばって努力したら上手に吹くことができると聴いて、私も挫けそうになったときがあつたら、がんばって乗り越えようと思いました。

どうしたら会話をしているように弾けるのか知りたいです。

みんなでリコーダーを吹いた後オーボエの先生が、「歌っているようにつなげて滑らかに吹くといいよ。」と教えてくれたので、今度やってみたいなと思いました。

「崖の上のポニョ」「千と千尋の神かくし」が弾んでいる様な感じでした。

家にあるCDと本などを合わせてみたいと思います。

初めバイオリンは暗い曲に向いていて、オーボエは明るい曲に向いているなと思っていただけれど、2回目の授業でバスンは明るい曲にも向いているし、オーボエも明るい曲にも暗い曲にも向いているんだと感じました。

プーラントの第3楽章で、悲しいところと明るいところを分かれていっぺんに弾いていて、うきうきわくわくしました。演奏している皆さんがリズムに乗って演奏していたので、ぼくたちはすごいその音楽になりきって聴けました。

たくさんの音がプーランクの曲に含まれていてふしぎでした。ピアノも気持ちを考えて弾いていきたいです。

時間割を見て、今日の音楽を楽しみにしていました。きれいな音色が聴けてとても嬉しかったです。

紙芝居が楽しかったです。

「弦楽器に親しもう」の第一回目の学習を通しての質問と回答、感想

川崎市立京町小学校 長谷川 知子先生 実施日：平成23年11月14日

#### 1) 質問

演奏していて一番大変なことは何ですか。

演奏していて一番大変な事は、日々の練習をしていてそれをちゃんと本番で出せるようにする事です。(チェロ)

他のことを考えてしまったり、何気なく弾くのではなく、音楽に集中することです。

(ピアノ)

一緒に演奏している人とのコミュニケーションです。一人ひとり本番での気持ちがちがうので。(ヴァイオリン)

チェロの下についている棒は何ですか。

エンドピンといって、およそ150年前くらいにチェロの音量を増幅するために開発されたものです。エンドピンができる以前のチェロはひざで挟んで楽器を固定していた為、エンドピンの開発により、演奏効果、演奏技能が飛躍的に伸びました。

それぞれの楽器が、なぜ好きになったのですか。

弦楽器の響きが好きで、楽器が木で作られているのも魅力のひとつです。(チェロ)

3-4歳の時、母に薦められて始めたので、最初は特に自分で選んだ楽器ではありませんでした。だんだん年をとってきて、人生いろんな大変なことが増えてくると音楽が心にしみるようになって、ピアノはわたしにとって、それを表現するのに適していると思いました。それに、他の楽器はピアノほど弾けませんから。(ピアノ)

他の楽器と一緒に演奏するようになってからと思います。(ヴァイオリン)

弓に馬の毛は、何本ぐらい使われているのですか。

150本くらい(チェロ)

100本以上です。200本ぐらいかも。それを止める弓の先と元に入る量です。(ヴァイオリン)

弓は馬のしっぽ以外にもあるのですか。

ナイロン製とかありますが馬のしっぽが一番いいです。(ヴァイオリン)

弓の種類はあるのですか。

弓の制作者によって全ての弓に個体差があります。(チェロ)

昔から形も長さも変わってきています。始めは撃つ弓に似ていました。(ヴァイオリン)

先生方は全部で何曲ぐらい演奏できるのですか。

基礎と応用ができれば何曲でも弾けます。(チェロ)

楽譜があればだいたいの曲は演奏することができるようになります。今は10曲位を練習しています。(ピアノ)

演奏した曲は数えられる数ではありません。でも演奏する前は又勉強しなおします。(ヴァイオリン)

チェロやバイオリンはどのくらいの重さなのですか。

ヴァイオリンーいろいろです。そして年数がたち乾いてくると軽くなります。私のは0.5kgぐらいです。(ヴァイオリン)

チェロは5キロぐらい

弦ははじくとき、指が痛くないのですか。指は切れないのですか。

最初はすごく痛いので、たくさん練習してタコができるようになると痛みもなくなります。

(チェロ)

たくさんはじく曲の時はいたいです。でも練習すると慣れてたこになります。(ヴァイオリン)

弦は切れないのですか。

めったに切れませんがたまに切れます。(チェロ)

切れます。コンサート中に切れないようにその前に変えたりします。上の弦のほうが細く切れやすいです。(ヴァイオリン)

バイオリンは明るい曲や暗い曲があるから、曲によって弦をかえるのですか。

変えません。自分で明るい音とか暗い音を作ります。(ヴァイオリン)

ビブラートは指、腕でかける以外に、何かかける方法はあるのですか。

テクニックとしてはビブラートをどうかけるかというセンスを磨く必要があります。(チェロ)

弦の場合はそれでだけです。歌や管楽器の場合は息でかけます。(ヴァイオリン)

バイオリンは1日に何時間ぐらい練習すれば、音楽大学に入れるのですか。

基礎をみっちり教えてくれる、いい先生に教えてもらえば上達は早いと思います。(チェロ)

時間数でなく頭を使って練習することが大切でしょう。でも毎日の練習は大切です。(ヴァイオリン)

バイオリンやチェロはどのくらい練習すれば、上手になるのですか。

人によります。すぐ出来る人と何年もかかる人があります。

チェロより大きな弦楽器はあるのですか。

コントラバスが最も大きい楽器です。全長2メートル弱あります。

バイオリンより小さな弦楽器はありますか。

普通は使いません。でも私の友人が作った楽器でピコロヴァイオリンというのがあります。

いつからそれぞれの楽器を始めたのですか。また、いつまで続けるのですか。  
バイオリンは幼稚園の頃から。チェロやバイオリンの音の追求は何年経っても終わりが無いので、それだけ、難しいともいえます。(チェロ)  
3-4歳からです。命がある限り、続けたいです。(ピアノ)  
4歳ぐらいではじめました。聞いている人が喜ぶかぎり続けます。(ヴァイオリン)

楽器を演奏していて楽しいですか。  
楽しいときもあれば大変な時もあります。(チェロ)  
楽しくないときもあります(気力がなく疲れているとき)が、だいたいは楽器を弾いている時が一番、心が晴れ晴れします。(ピアノ)  
コンサートの時は楽しく弾きます。練習の時は苦しいこともあります。(ヴァイオリン)

バイオリンと仲良しですか。  
質問がよくわからないのですが。ヴァイオリンの松田先生とわたしはアメリカの同じ大学で勉強していたんですよ。大先輩です。(ピアノ)  
Violinと私は仲良しです。でも時々けんかもします。(ヴァイオリン)

楽器を弾いているときは、何を考えているのですか。  
練習する時はまず作った人が何を思って作ったか、それを私がどう感じるかを考えます。そして、それをどう演奏すれば聞いている人に伝わるかを考えながら勉強します。コンサートで演奏する時はなるべく自分でも楽しみながら演奏します。(ヴァイオリン)  
その都度違います。色々な想いが在る中で生きているように色々な演奏があります。(チェロ)  
練習しているときは、すべての音が自分の思うように聴こえているか、細部に気をつけるようにしていますが、人前で演奏しているときは、この音楽の魅力が伝わりますようにと願いつつ、音に集中しようと思っています。(ピアノ)

何でそれぞれ楽器をやると思ったのですか。きっかけは何ですか。  
6歳から始めました。親が何か楽器をやらせたく、そのころやっと見つけたのがヴァイオリンだったので。親が何か音楽を、ということで始めました。親のピアノが戦争で焼けてたまたまヴァイオリンが見つかったからです。  
(第2次世界大戦後日本に物がなかった時代です。)(ヴァイオリン)  
幼稚園の頃だと思いますが、親の意思でバイオリンを始めました。あんまり覚えていません。(チェロ)  
3-4歳のときに、母に薦められて始めました。本当に自分からやりたいと思ったのは大学に入ってからでした。(ピアノ)

絶対音感を持っているのですか。  
ありません。(チェロ)  
だいたいあります。(ピアノ)  
持っています。でも必要なことではありません。(ヴァイオリン)

ピアノの楽譜をめくるときに、両手で弾くところだったらどうするのですか。

本当は譜めくりをしてくれる人に頼んで、自分では譜めくりをしなくてよい状態で演奏会に出るのですが、今回はなるべく片手だけのところで譜めくりがくるように、楽譜をコピーして切ったり張ったりしました。するどい所に目をつけましたね。

チェロは大きくて低い音ですが、何か関係はあるのですか。バイオリンは小さくてチェロより高い音が出ますが、関係はありますか。音の高さと楽器の大きさの関係は。

音の高低のメカニズムは音の振動数に関係があります。

掲題の場合

弦の長さが長いと低い音、弦の長さが短いと高い音が出ます。

弦の太さが太いと低い音、弦の太さが細いと高い音が出ます。

弦の張りが弱い（おもりが少ない）と低い音、弦の張りが強い（錘が多い）と高い音

つまりバイオリンより弦の長いチェロはバイオリンより低い音が出ます。

チェロより弦の長いコントラバスはチェロより、低い音がでます。

ピアノとオルガンは何が違うのですか。

両方とも鍵盤があるので弾き方は似ていますが、オルガンは空気がパイプやリード（ハーモニカにもついている機能）の中を通過して、空気の流れが音を出していますが、ピアノはハンマーを弦で打って鳴らして、それが振動しているので、音の出るしくみが違います。

どうしてあんなに早く弾けるのですか。

最初はゆっくりからはじめて、練習あるのみです。（チェロ）

毎日練習することだと思います。（ピアノ）

ゆっくりからだんだん早く弾けるように練習します。（ヴァイオリン）

どうして弾くときに体を揺るのですか。

弾く為に体を揺るというよりかは、自分が欲しい音をだすために、体の動きを利用するといったそれもテクニックのひとつです。（チェロ）

音楽を身体全体で感じているので、音楽の流れに合わせて弾くと弾きやすくなります。（ピアノ）  
なにかお話するときに体を使うのと同じことです。（ヴァイオリン）

最後にチェロに洋服をかぶせていて、何でかなと思いました。

チェロケースの中で楽器が傷つかないようにするための楽器への愛情です。

ピアノをずっと弾いていて痛くならないのですか。

15時間位演奏し続けたら痛くなるかもしれません。後、悪い弾き方で弾くと手を傷めやすいので、気をつけています。

どうしてピアノの方をほとんどみないで、楽譜を見て弾けるのですか。

40年もずっとピアノを弾いているので、鍵盤の並びが手触りでわかるようになっています。

「幻想即興曲」は弾けますか。

弾けますよ。小林さんはその曲が好きですか？

手をあんなに動かして、疲れないのかと思います。

よく疲れます。(チェロ)

## 2) 主な感想

弦楽器にすごい種類の弾き方があるのにビックリしました。

ピアノも演奏する人や楽器によって音が変わるのがよくわかりました。

音楽はソロもいいけど、合わせて弾く方がとてもきれいでいいと思いました。

ピアノも弦楽器もみんな強弱が付けられるんだと思いました。

ピチカートの音が普通に弾く音と変わっていたので、いろいろな場面を表現する音を聴きたいです。

初めてチェロの音を聴いて、低い音が出てバイオリンと違うことがわかりました。

ピアノはすごい速さで弾いていたのでビックリしました。

ピアノはとてもうまい人が弾くと、こんなになるんだとわかりました。

生でしかもただで見る事ができて、ベリーグッド！

この授業でいろいろなことがわかりました。特に、バイオリンとチェロは同じ音が出せることです。ピアノは弦があることです。

どれもとてもきれいな音色でした。

素敵な曲を聴かせてくれてありがとうございました。

今日の演奏はすごすぎて大変でした。ぼくも演奏者になりたい。あんな演奏ができたらいいな。

全体の音色と響きがピッタリあってものすごくいい音を出しているのが、ものすごく良かったです。

バイオリンの音が高くてきれいだった。

すごくきれいでビックリしました。

高い音と低い音のハーモニーがきれいでした。

チェロは低い音しかでないと考えていたけど、高い音も出て意外だった。

音が幻想的でした。

バイオリンとチェロは細かく弾くとちょっと怖くなった。弦をはじくと痛くなるような音がしてビックリした。

「生命の息吹」を聴いて貰いたいです。次の授業が楽しみです。

生で演奏を聴くことができるととてもすごいと思いました。

ピアノはバイオリンとチェロより良いところがあるから、探してみたいです。

私はピアノを習っていますが、88鍵盤を上手にを使って、なめらかできれいに弾いていて憧れました。これからもいっぱい練習したいです。

こんなに近くで見ることができ、すごく嬉しかったです。

最後の曲はどこかで聞いたことがありました。久しぶりに聴きました。

バイオリンとチェロは弾き方を変えると音が怖くなったり、ポーとしたような音が出てすごい。

ぼくはチェロの音がいい音だと思いました。理由はバイオリンのようにキンキンしていないからです。

バイオリンの音が良く響いていたのできれいだなと思いました。チェロの音は、とても落ち着いた音で低い音もきれいです。ピアノもあんなに細かい音も弾けるのですごいです。3人のハーモニーがとてもきれいでした。

バイオリンは初めて弾くとギコギコすると言うのを聴いてビックリしました。簡単な楽器かと思っていました。

チェロはとても大きくて、低い音や強弱がすごかったです。ピアノは高い音がきれいでした。ピチカート以外の様々な技法を実演してくれて、とても分かりやすかった。チェロの音は親しみやすい音だった。

「弦楽器に親しもう」の第二回目の学習を通しての感想

川崎市立上丸子小学校 名畑 靖子先生 実施日：平成23年12月19日

ラヴェルの作った曲のだんだん盛り上がっているところが、迫力があってすごかったです。同じ音楽が何回もくり返されていて、きれいではなやかに聴いていて楽しくなりました。情景が浮かんでくるようで楽しくなりました。

「ハウルの動く城」で、あそこまでバイオリン、チェロの音の強弱ができるのは、とてもすごいと思いました。

「ハウルの動く城」では、僕は感動して鳥肌が立ちました。音楽を聴くのが好きになりました。作曲家達は、何かのイメージを浮かべながら作っているんだなと思いました。

チェロの先生が作った曲がすごくきれいでした。本当に少しずつ花が開いていくように思えました。作曲する気持ちが少し分かることができ良かったです。花がゆっくりゆっくり開いていくように表現されていると思いました。小さい音から大きい音へ変化しているところが、花ががんばって咲こうしているイメージがあるなと思いました。僕は、作曲家の人がいろいろなことを考えているんだと思い、今度からはその気持ちが知りたいです。

花がゆらゆらゆれている感じがしました。私は音楽を聴くとき、何も思わないで聴いていたけれど、今回の授業をしてもらって音の強弱や大小の工夫をしていることが分かって、音楽を聴くときは気をつけて聴きたいと思います。

私たちのキリマンジャロをもっと強弱をつけたいと思います。チェロとバイオリンとピアノのキリマンジャロは面白かったです。3人の先生のキリマンジャロはすごくきれいな音色が出ていてすごかったです。すごくリズム感があって、やっぱりすごいと思いました。3人の先生のキリマンジャロを聴いて、力強さに感動しました。最後の部分がピシッと決まっています。アドバイスをもらって今度から気をつけてやってみようと思いました。

透きとおる感じの音色で聴いていて楽しいし、いろんな事を忘れて優しい気持ちになれるのでとっても良かったです。力の入れ方で、音の感じが変わることが分かりました。僕は、3人の先生はみんな高度な演奏しているのがすごいなと思いました。

音楽を作った人の気持ちを考えると、音楽が楽しくなるなと思いました。  
音楽の雰囲気を実感して聴くと、とっても音楽が楽しくなること発見しました。技がたくさんあって驚きました。  
ピアノの先生の手の動きがすばやくて、すごいなと思いました。  
先生方は音楽の強弱を体で表現していました。ピアノの先生は首に力を入れたり、肩から指にかけて力入れたり、チェロの先生は顔の向きをちょっと変えたり、バイオリンの先生は首を振って音を調節したりしていました。  
音楽は私たちに何か伝えているみたいだなと感じました。  
ピアノの先生が言っていたように、音楽は本当に人をつなぐもの、コミュニケーションがとれることはすごいことだなと思いました。  
速さの違いが曲のイメージを変えることが分かりました。また、激しい曲に間を入れると静かな無に近いイメージが変わるのが不思議に思いました。  
前の時間でもバイオリンやチェロ、ピアノが弾く前に息をすごく吸うのは、歌を歌うときと同じで、発声するみたいに弾くとききれいな音色がでるのかなと思いました。

## おわりに

報告書をつくりにあたり、今まで8年間に川崎市全7区の小学校で行なってきたアウトリーチ活動を振り返った。始めはそれぞれの場所による地域性から教育内容に差異が必要かと思われたのだが、実際には地域別の違いは感じられず、子どもたちの創造性や感受性に境界線はないことを実感した。

音楽を聴く喜びを共感する心を育成し、音楽文化を生涯の友として、豊かな人生を送るきっかけとなって欲しいという願いから、子どもたちとプロの演奏者が近距離に身をおき、ティーチングアーティストによる双方向的なコミュニケーションやインターアクションを取り入れたアウトリーチプログラムをつくってきた。こうした活動を単発的なボランティアイベントとして終わらせるのではなく、パブリック・エデュケーション（公益的教育活動）として、そして芸術による社会的価値を創る活動として、これからも、持続的に、且つ発展的に展開していくために、最後に、今後の取り組みの課題として以下の3点を挙げる。

### 今後の取り組み

#### 1) 小学校との関係作り

まず、受け手となる小学校との関係づくりの重要性である。このような活動は、実際の活動現場となる小学校の先生方の協力や、保護書の理解が、何よりも大事である。従って、学校での音楽教育とアウトリーチ活動が、どのように連携していけるのかを話し合う機会、あるいはこうした活動が存在することを広める場を、教育委員会等にはたらきかけてつくることも必要だと考える。そのようにして出前演奏会希望校との交渉を円滑に進めていける体制づくりが必要ではないかと思う。

将来的には、一回ずつ実施する単発的な授業と並行して、年度内に複数回の関連する授業を提供する長期的なレジデンシープログラムを実施する可能性を探っていきたい。

#### 2) アウトリーチに必要な技能開発

音楽文化を享受する聴衆の開拓には、人と関わるコミュニケーション力が必要である。双方向的でインターアクティブな参加型アウトリーチプログラムをつくる技量は、演奏技術のみでは充分ではない。

自分の受けてきた教育を含めて、音楽大学では専門性が強く、社会との接点をつくるキャリア意識が低い状況が続いている。また、学生の中には演奏は卓越しているが、人と関わるコミュニケーション力が乏しかったり、反対に教育

には関心があるが、音楽の実力は伴わないといった偏りが見受けられ、音楽教育者を志す者と演奏実技を専門とする者との職能が分離している傾向がある。

そこで、芸術の高い技術と同時に、芸術的な教育を施すことの両方を兼ね備えたティーチングアーティストの職能を明確に位置づけることにより、その技能を高めていくことが、今後の音楽文化の広がりを考える上では重要ではないかと考える。加えて、大学等の教育機関においても、ティーチングアーティストの意義を広めることと、そのような専門職能を養成していく仕組みを構築することが、今後の大きな課題だと捉えている。

### 3) 活動資源の調達

プロの演奏家をアウトリーチ活動に講師依頼する際には、リハーサルや移動等も含めて費される時間や費用を考えると、通常予算により小学校側から提供される謝礼のみでは充分とはいえず、ボランティアに対応してもらる範囲に活動範囲が限られてしまう。非営利公益的活動にプロの演奏家が、快く参画できるような基盤づくりにも取り組まねばならない。

このような努力が、活動の質と継続性を担保し、活動の機能や意味を、受け入れる側に理解してもらうことにつながると考える。同時に、このような努力が、活動をより健全に発展させて、確実に地域に届けていく基盤をつくることになると思う。

そのような面では、今年度は、イェール大学とカワイサウンド技術・音楽振興財団の二つの支援が得られたことが大きく、例年より多くのプロの音楽家に演奏を依頼して地域に活動を届けることができた。しかし、年度ごとの助成はどうしても不安定であり、今後は必要な財政的資源を、どのように持続的に生み出すかが大きな課題である。

このような活動については、その受益者が直接費用を負担するのは難しいので、それを取り巻く地域社会の他の構成メンバーが、支援や助成を行なうことによって、あるいは既存の事業と連携してシナジー効果を生み出していくことによって、活動を支えていくことが必要だと考えられる。

その意味では、地域ごとに公益的側面を担っている各種セクター、すなわち行政、企業、財団、大学等の教育機関等に、このような活動の意義をよりの確に理解してもらえるようはたらきかけていくことも必要かと思う。また、現在までの活動の運営はほとんどが個人のつながりを元にしたものであるが、今後は組織的に活動するための体制の充実も望まれる。

## 今後の展開

活動を持続的に実施する環境を整えていくこと、ティーチングアーティストの技能を高め、よりよいアウトリーチを開発していくことにより、ハードとソフトの両面を充実させ、音楽の力を充分発揮できるようにすることが、今後の目標となる。そのためには日々の技術力の向上と同時に、先導的な事例（例えば、米国のニューヨーク・フィルハーモニーの教育プログラムや、ジュリアード音楽院やマンハッタン音楽院のアートインエデュケーション「芸術教育」のティーチングアーティスト養成プログラム）を研究したり、他分野におけるアウトリーチを参考にすることも重要と考えられる。

今年度の成果を踏まえ、子ども達からの質問や感想文、アンケート、小学校教師からの評価、プログラムを実践した演奏家間の省察を基に、活動内容の効用性を検討し、次年度の活動に反映させていきたい。

今年度までは、小学校が主たるアウトリーチ先だったが、ティーチングアーティストの活動領域を広げ、中学生や高校生・シニア世代を対象とする可能性も探っていきたい。

## まとめ

音楽は、人間にとって最も大事な心の支えになり、好奇心・向上心を高めようとする精神をはたらかせることを可能とする。音楽を聴いたり、つくったりする時は、日常を忘れさせるような、密度の高い時の流れに身を置くことができる。音楽に込められたメッセージを、境界線をつくらぬ市民全体に届けることを願って、今度も活動を続けていく道を探っていきたい。

## 謝辞

末尾になりましたが、この活動に積極的に協力して頂き、諸々の事務的な作業をこなし、未知の活動に自主的に進んで挑戦してくださり、我々演奏家を暖かく迎えてくださった川崎市立の小学校（東生田、上丸子、高津、京町、古市場、宮前平、橘小学校）の先生方、校長並びに教頭先生、関係者の皆様、土淵保育園の先生方、活動現場に何度も足を運んでくださった川崎市教育委員会の先生方に、心からの感謝を申し上げます。

また出前授業に楽しそうに参加してくれ、沢山の質問や感想、そして我々にパワーをくれた子ども達の笑顔に、「有り難う」と再度伝えたい。よりよいプログラムをつくるために一緒に考え、時には迷い、そして心のこもった演奏をしてくださった共演者の方々のお力なしでは、この活動は成り立ちませんでした。引き続きよろしく申し上げます。

最後になりましたが、本年度の活動を実施するにあたって、イェール大学音楽学部卒業生のための活動助成(Yale University Alumni Ventures Award)、カワイサウンド技術・音楽振興財団音楽振興部門の活動助成を頂いたことを記すとともに、この場を借りてお礼申し上げます。

リトルクラシック in Kawasaki  
ディレクター 大類 朋美